田村志津枝さん コラム

PICK UP MOVIE

『サントメール ある被告』

9/23〜

[2022年／フランス／フランス語／123分]G
監督：アリス・ディオップ
脚本：アリス・ディオップ、アムリタ・ダヴィッド、マリー・ンディアイ
出演：カイジ・カガメ、ガスラジー・マランダ、ロベール・カンタレラ

© SRAB FILMS – ARTE FRANCE CINÉMA – 2022

旧植民地からの重い問いかけ

フランス北部の町サントメールで、生後15か月の娘を海辺に置き去りにして殺した母親の裁判が始まった。被告人ロランスは、なぜ殺したのかと尋ねられ、「私にも分からない、裁判を通して何故かを知りたいと思う」と答える。真実はどこにあるのか。

画面の大半が、被告人席にいるロランスを捉えている。その表情や言葉を丁寧に映し出し、内に秘められた複雑な物語を伝えようとする監督の意志が読みとれる。

ロランスは、かつてフランスの植民地であったセネガルで生まれ、フランスに留学し哲学を学んでいた。法廷には、やはりセネガルにルーツを持つ作家のラマが傍聴に来ている。それにロランスの母親もいる。だが、この3人以外はすべて白人だ。

しかしながら一方で、これはフランス司法界の実情を反映してるのだが、司法側は裁判官3人弁護士2人はすべて女性、検察官と予審判事の2人のみが男性だ。こんななか、ロランスの犯行の原因が探られ、犯行に至るいきさつが語られていく。この映画のセリフは、作品のモデルとなった事件の裁判記録がそのまま使われているそうだが、そこには西洋人なら気にも留めないであろう、ロランスへの微細な辱め、差別、軽視、無視が見え隠れする。それらひとつひとつが、ロランスの哲学者への夢を挫いていった違いない。

さらに重要な問題のひとつが、言葉だ。セネガルでは今もウォロフ語などの土着語は軽んじられ、公用語はフランス語だから、社会的成功のためにはフランス語習得が必須だ。ロランスはアフリカ訛りのない完璧なフランス語を身につけている。だが裁判で彼女は、自らの文化的背景や精神世界を説明するよう求められても、フランス語ではその言葉がみつからない。真実に近づくのは至難だ。

作家のラマは、裁判を傍聴するうち精神的に追い詰められていく。ロランスを取り巻く厚い壁、母親と娘の間にも横たわる抑圧による複雑なねじれは、ラマにも共通している。それを解きほぐすことなどできるだろうか。

監督のアリス・ディオップもセネガル系フランス人だ。彼女はロランスの存在をすべての人の心の深奥に響かせようと、慎重に物語を紡いでいく。社会の周縁に置かれたロランスを中心に据え、社会が受け入れやすい単純化を拒否して、入り組んだ感情を掘り起こしていく。それこそが人類が過去に積み上げてきてしまった、植民地差別や性差別など数々の差別を拭い去る一歩だとの確信を込めて。この映画は、重い問いを投げかけてくる、見ごたえのある秀作だ。

プロフィール
田村志津枝：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた　1977 年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983 年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。